

## 黒田畫伯の配色談

裝飾に意を用ゆるのは女子の先天的習慣であるが、日本人の其習慣は慥かに西洋人より劣つて居る所がある

日本では譬へば納戸色が流行するとなると誰でも、彼でも納戸に適せん人も適する人も皆納戸色の衣服を着る、又紫の流行する時は紫許りを好み色の配合だの調和には少も注意しないのである

西洋では婦人が帽子を購ふ時は自分の皮膚の色と、其の反対色を選ぶので、衣類でも其他の裝飾品でも總べて此の如く色の配合に注意する、紅顔者流は其の反対色なる綠色とか又顔色蒼白なる人は紅にて彩れるものを選ぶとか總べて、皮膚の色と相反映せしむると云ふ風である

色の引立つとか引立たぬとか、或は品位のよしあしは皆其色を彩れる色の配合如何に依るものである、それ故萬人に通じ誰にも適すべき色のある筈はない、此等の簡易な事理をさざ解し得ない人の多いのは實に残念ではないか、それで今簡単に色の配合、色の區別、色の性質を話して見よう

先づ赤青黄の三色を主色として、此三色の混じり方で總ての色が出来るのである、譬へば赤と青を混じると紫といふ色が出来、赤と黄を混ざれば緑となり、黄と赤を混ざれば橙色となる、是即ち造色の方法だ

前にも述べた青赤黄の三色が主色で青は寒色、赤は温色、黄か中間色で又温色に屬するものなのである寒色は温色の反対色で紫緑は中間色であるが寒色に屬して居る、又黄、橙色は温色に屬するものであるから此の寒温二色

を程よく調和すれば宜いのである

それで寒色と寒色を並列せねばならぬ場合には、此二色の間へ白の線を入れて調和すればよい、但し金銀の如き金屬性の色は寒温色を問はず何の色でも調和し得る、黒白の二色は極色と名付け是亦金銀と同じく配合し得らるゝのである、然し場合に依ると黒と赤との配合は凄い感情をあたへる場合が有る、而して青、赤は反対色では有るが此二色を並べると餘り高尚な感じはせぬ、故此れも白を間へ入れた方がよい

以上述べた様な風に色の配合を以て頭の飾りから衣服下駄 ショール等に注意すればよいのである

〔『美術新報』二十四明治三六年五月五日〕